

2005年に検索した豚の病気—主として肺炎について—

久保正法 (動衛研)

Kubo, M.(2006). Swine diseases examined in 2005. -Mainly about pneumonia.  
Proc. Jpn. Pig Vet. Soc., 49, 7-8.

豚の肺炎は、PRRS ウイルスおよび PCV2 感染により多発している。これらのウイルス感染に引き続き、様々な細菌感染あるいは日和見感染が起こる。今回は、2005年に病性鑑定を実施した豚143頭に基づいて、豚の病気の実態、特に肺炎について概説する。

PCV2 感染が疑われたものが最も多く44例であり、次いで PRRS の24例であった。PCV2 と PRRS の同時感染は9例に見られた。化膿性髄膜炎が17例、大腸菌症が16例の順であった(表1)。単独感染例は少なく、多くは複合感染であった。

表1 2005年に検索した143頭の疾病と頭数

疾病名	頭数
PCV2感染	44
PRRS	24
化膿性髄膜炎	17
大腸菌症(浮腫病、AEEC)	16
App	10
マイコプラズマ肺炎	10
漿膜炎(グレーサー病)	8
クリプトスポリジウム寄生	5
サルモネラ症	3
心外膜炎	3
増殖性腸炎	3
トリコモナス寄生	3
鞭虫寄生	3
壊死性腸炎	2
カリニ肺炎	1
豚痘	1

病気を年齢別に見ると、PCV2 感染は20日齢以降に見られ、80から140日齢の豚が大部分を占めていた(表2)。PRRS は0-20日齢の若齢豚でも見られ、80-100日齢が最も多かった(表2)。Actinobacillus pleuropneumoniae (App) 感染は、20日齢から140日齢まで見られ、100-140日齢が半数であった。マイコプラズマ肺炎も App 感染と同様な傾向が見られた。連鎖球菌による化膿性髄膜炎は17例に見られ、20-60日齢が過半数を占めていた(表2)。

PCV2 感染は、リンパ組織におけるリンパ球の著しい減数、MPS 細胞の活性化および多核巨細胞の形成、PCV2 に特異的な封入体で診断した。PCV2 例の日齢と封入体との関連を表3に示した。20-60日齢で PCV2 と診断した症例は8例あったが、そのうちの1例にのみ細胞質内封入体が確認された。60-100日齢では19例が PCV2 感染と診断され、そのうち16例(84.2%)で封入体が確認された。100-140日齢では、17例中4例(23.5%)で封入体が確認された(表3)。20-60日齢で、リンパ球の著しい減少は見られるものの PCV2 の封入体が見られないことの機構の説明に苦慮している。

PRRS ウイルス感染による肺胞中隔の肥厚は24例で見られた。PRRS ウイルスに対するワクチンが開発され、利用されるようになった現在でも、PRRS は大きな問題となっている。PRRS ウイルスに対するモノクローナル抗体が市販されており、病理学的な確定診断は容易になった。

表2 年齢別発生状況(1)

	PCV2	PRRS	PCV2+PRRS	App	マイコ	グレーサー
0-20	0	5	0	0	0	2
20-60	8	6	1	3	1	1
60-100	19	10	5	2	3	2
100-140	17	3	3	5	6	3
合計	44	24	9	10	10	8

表2 年齢別発生状況(2)

	髄膜炎	大腸菌	浮腫病	AEEC
0-20	0	1	0	0
20-60	11	0	5	3
60-100	6	4	0	1
100-140	0	0	0	2
合計	17	5	5	6

表3 PSV2 例の日齢と封入体の関係

	PCV2	封入体(+)	%
0-20	0		
20-60	8	1	12.5
60-100	19	16	84.2
100-140	17	4	23.5
合計	44	21	47.7

*App* 感染は、20-140日齢の10例に見られた(表4)。*App* の単独感染と思われたものは3例であり、PCV2感染が関与していたものは5例であり、*Pasteurella* 感染および鞭虫寄生がそれぞれ2例で見られた。

マイコプラズマ肺炎は10例に見られた。20-140日齢の10例にみられたが、60-140日齢が9例であった(表2)。気管支周囲のリンパ濾胞が過形成する前の、肺胞腔内にマクロファージや好中球の浸潤を伴うカタル性気管支肺炎のものが多かった。

*Pneumocystis carinii* による肺炎(カリニ肺炎)が1例で見られた。カリニ肺炎はPRRSが日本に浸潤してからしばしば見られるようになった。また、モノクローナル抗体が市販されており、免疫組織化学的に証明することも可能になった。

浮腫病は20-60日齢の5例で見られたが、肺病変が顕著なものが1例見られた。肺胞中隔は水腫性に肥厚し、肺胞腔内には漿液が貯留していた。